

大正九年六月十三日

合名會社鈴木商店濟美會

會 長 鈴 木 岩 藏

弔 辭

光陰匆匆客月十五日君ノ逝去セシヨリ既ニ三十日ヲ經過セリ而シテ風丰髣髴今猶眼前ニ來往シ未タ其永眠ヲ信スルニ至ラサルナリ噫哀哉

大正日日新聞近來變人論ナルモノヲ連載セリ顧フニ君ノ書畫ヲ購求スルヤ展觀幾日凝視幾回周ネク同好ニ批評セシメ研究徹底而シテ後之ヲ買取スルヲ常トセリ然ルニ一朝罹病身命ヲ託スルニ當リ舊知ノ二國手ニ信賴シテ他ノ診脈ヲ肯セサリキ萬金以テ購ヒ難キ身體モ君ニ於テハ容易ニ購ヒ得ヘキ書畫ニタモ及ハサリシ感ナクンハアラス君豈變人論中ノ人ナラサルヲ得ンヤ其人ヲ信任スル概ネ此類ナリ敦厚ノ士ニアラスンハ焉ンソ能ク斯ノ如クナランヤ

君一日余ノ机邊ニ來リ謝シテ曰ク食堂過ツテ貴君ノ食器ヲ破壊セリ請フ之ヲ恕セヨト辭令懇切態度謹嚴ニシテ禮意慇懃ヲ極ム余ハ啞然言フ所ヲ知ラス其答辭ニ窮シタリシナリ實ニ方今稀ニ觀ル謹直ノ士ナリト謂フヘシ

夫レ世間禮儀ヲ解セサルモノ往々來リテ人ノ机邊ヲ徘徊シ机上ヲ瞰視ス其最モ非禮ナルモノニ至リテハ机上ノ書類ヲ把弄スルモノナシトセス然ルニ君ノ坐ヲ起チテ余等ノ机邊ニ來ルヤ必ス故ラニ机邊ヲ回避シ以テ事務ヲ談シタリキ僚友棕野武吉氏君ヲ月旦シテ曰ク終始一貫軌上ヲ行動セシ人ナリ是ノ故ニ曾テ脱線的行爲ナシト評語適切頗ル妙ナリト謂フヘシ蓋シ其謹嚴ノ態度用意ノ周到寔ニ君子人ノ風格ヲ具有セシモノト稱スヘキナリ

畏友岡本良太郎氏君ノ歿後弔辭ヲ余ニ送リ來ル其文ニ曰ク故人ノ人格ハ萬人ノ追慕シテ措カサル所ナリ世ニ所謂秉公持平主義ナルアリトセハ故人ハ實ニ其忠實ナル實行者タリシナリ纖々タル風貌ノ下ニ潜メル百折不撓ノ忍耐力淡々タル談話ノ裏ニ隱レタル無限ノ同情佞骨媚骨驕骨貪骨淫骨而シテ又硬骨此人ニ在リテハ悉ク是レ一視同仁今ヤ此人枯骨トナリテ湖北ノ野ニ歸ラントス天ヲ恨ミ

人ヲ呪フテ尙諦悟スル所ヲ知ラサル也遙ニ故人ノ高風ヲ偲ヒ故人ト水魚ノ交アリシ貴下ニ一書ヲ呈スト

嗚呼敬讀一過余ハ萬感胸臆ニ逼リ來ルヲ覺ユルナリ茲ニ本日ヲトシ五七忌ノ法會ヲ營ムニ當リ聊カ所懷ヲ陳ヘテ微忱ヲ表ス尙クハ饗ケヨ

大正九年六月十三日

森 衆 郎

(其 三)

弔 詞

維大正九年五月十五日我鈴木商店本店支配人西川文藏君病ヲ以テ神戸ノ自宅ニ長逝セラル悲哉痛哉

君人ト爲リ温厚和粹玲瓏玉ノ如シ且聰敏慧悟人ニ超ユ夙ニ志ヲ實業ニ抱キ笈ヲ東都ニ負ヒテ東京高等商業學校ニ學ブ明治二十六年故有リ半途ニシテ學窓ヲ

退キ鈴木商店ニ入りテ實務ニ膺ル爾來凡ソ三十年也君ノ商店ニ在ルヤ鉛意勵精拮据黽勉孜々トシテ維レカメ總理柳田金子ノ二氏ヲ輔ケテ商店ノ中樞ト爲リ恪勤努力終始一日ノ如シ凡ソ劇務ノ紛擾セル身ヲ以テ人ニ代リ處事ノ困難ナル逸ヲ去テ勞ニ就キ些ノ倦怠畏避ノ態無シ我鈴木商店財界ニ崛起シテ蒸蒸日上ニ進ミ遂ニ今日ノ盛大ヲ致セルモノ君亦與テ力有ルハ衆皆認ムル所ナリ君ノ功勞亦偉大ナリト謂フベシ君平生抑遜謙退自家ノ功名聞達ニ冷淡ナリ唯一身ヲ捧ゲテ主家ノ爲ニ竭シ己ノ職務ニ盡瘁ス風雨寒暑身ヲ以テ衆ニ先ンジ鞠躬虛懷己ヲ忘レテ上位ニ從フ復タ其他ヲ顧ミサルナリ君ノ如キハ亦以テ現代店員ノ儀範ト謂フ可キナリ

今ヤ財界多事ニシテ我商店ノ君ノ手腕ニ待ツモノ甚ダ大ニシテ君ノ抱負モ亦小ナラザルニ奈何ンゾ旻天無情年ヲ君ニ假スヲ慳ミ溢焉吾等ヲ捐テ、逝カル痛悼ニ勝フ可ケンヤ

本日我商店ハ神戸ニ於テ特ニ店葬ノ盛儀ヲ行フニ當リ吾等當地ニ於テ追悼ノ法要ヲ營ミ遙ニ幽魂ヲ招イテ哀悼ノ忱ヲ表ス

時維レ春暮レテ黄塵空ニ滿チ飛絮落花滿目黯慘君ヲ懷フテ悲惻シ坐ロニ花ニ
 モ涙ヲ濺キ鳥ニモ心ヲ傷マシムルノ感有リ幽魂知ルアラバ冀クハ吾等ノ微衷ヲ
 昭察セラレヨ嗚呼哀夫

大正九年五月二十三日

合名會社鈴木商店

滿洲各支店出張所員總代

濱田正稻

弔詞

大正九年五月十五日西川文藏君逝ク嗚呼哀哉君夙ニ東京高等商業學校ニ學ビ
 明治二十七年三月鈴木商店ニ入レリ明治三十五年十月同店ガ組織ヲ改メ合名會
 社ト成ルヤ君學ケラレテ支配人トナリ爾來今日ニ至ル迄二十年其間金子、柳田兩
 重役ヲ佐ケテ店務ヲ統轄シ其獻身ノ精神ト縱橫ノ商策ハ着々效ヲ奏シ鈴木商店

ヲシテ今日ノ大ヲ致サシメタルモノ實ニ君ガ内部ニ於ケル努力奮闘ノ結果ニ出
デタルモノ多シトス君資性温厚篤實同店各方面ニ渉ル三千ノ店員ヲ率ユル親切
ヲ極メ衆望齊シク君ニ歸セリ君平生身ヲ持スル謹嚴其ノ攝生ノ如キ亦極メテ意
ヲ致ス所ナリシモ店務ノ爲メ一意専心傾倒シタル精勵恪勤ハ多ク一身ヲ顧ルニ
遑アラズ遂ニ有爲ノ春秋ヲ餘シテ遠逝セラル今ヤ世界兵火ノ大戰亂戢マリテ平
和經濟戰ノ時代ニ入り我邦人ノ海外貿易發展ニ從事スヘキノ秋ニ當リ君ノ如キ
有爲ノ士ヲ失ヘルハ國家ノ損失ニシテ誠ニ痛恨ニ堪ヘザル所ナリ余曾テ職ヲ神
戶支局ニ奉シタルヲ以テ君ト相識ルコト淺カラズ平生竊ニ君ノ人格ヲ敬スルコ
ト頗ル深シ本日同人相會シ共ニ君ヲ追悼スルニ方リ感慨殊ニ無量ナルモノアリ
爰ニ友人一同ニ代リ恭シク弔詞ヲ述ブ

大正九年五月二十三日

吉岡荒造

弔詞

維時大正九年五月十五日本店總支配人西川文藏氏不幸二豎ノ冒ス所トナリ溢
焉トシテ逝ク哀悼何ゾ堪ヘン氏ハ江州ノ人夙ニ東京高等商業學校ニ學ビ英才常
ニ群ヲ拔ク其鈴木商店ニ入ラレタルハ明治二十七年三月ニシテ實ニ先代鈴木岩
治郎翁歿後苦楚經營ノ秋タリ當時ニ於ケル我鈴木商店ハ未ダ神戸ニ於ケル尙三
四流渺タル一個人商店ニ過ギズ僅ニ樟腦砂糖ヲ以テ其立脚ヲ培フノ時代ニシテ
現重役柳田、金子兩氏ト共ニ時ニ現場仲仕連ヲ指揮シ或ハ砂糖ノ看貫受渡ニ任ジ
出デ、得意先並ニ銀行等ト折衝シ夜ニ入リテ始メテ一日收支ノ帳簿ヲ執ラレタ
ルガ如ク連日克ク刻苦獻身的ニ鈴木ノ大ヲ爲サシムル事ニ努メ精勵ノ效顯ハレ
テ愈々發展隆昌ノ曙光ヲ認ムルニ至リ遂ニ個人商店トシテ充分其驥足ヲ延バス
ニ適セザルヲ思ヒ乃チ明治卅五年十月一日斷然組織ヲ更メテ合名會社鈴木商店
ト爲スニ及ビ氏選バレテ本店總支配人ト爲リ業務擔當社員鈴木よね子刀自ハ固
ヨリ柳田、金子兩氏ノ補佐ニ努メ爾來年ト共ニ發展ヲ致シ月ニ内地支店出張所ヲ

増設シ日ニ外歐米ニ販路ヲ擴張シ今ヤ海外内國ヲ通ジテ宇内ニ支店ノ網ヲ作り兼テ直系支店ノ外分身並ニ關係會社ノ數百ヲ以テ數フルニ至リ産業ノ總テニ亘リ商品ノ悉皆ニ及ビテ鈴木ノ企業取扱ニ係ルモノ頗ル多ク世人ヲシテ驚嘆セシムルニ至リタルモノ固ヨリ柳田金子兩氏畫策奮闘ノ結果ニ歸スベシト雖モ亦以テ同氏ノ内助努力ノ效アル無クンバ何ゾ竟ニ能ク今日ノ大ヲ爲サンヤ洵ニ是レ鈴木ノ創設者タリト謂フモ敢テ過言ニ非ズ而モ今ヤ則チ亡シ噫悲シイ哉

氏資性温良恭謙摯實ニシテ敦厚亦精勵恪勤他ノ企及シ得サルモノアリ平素親ニ事ヘラル、至孝人ヲ待ツニ懇切其人格ノ至醇ナル洵ニ當世稀ニ見ルノ人タリキ而シテ鈴木商店直系ト傍系ノ會社ニ入ラシメタル者一時無慮三千ヲ超エタル時頃來殆ンド同氏ノ選補ト推舉ニヨリテ採用セラレザルナク而モ何人ト雖モ其一度知遇ヲ與ヘラレタル者ニシテ未ダ曾テ氏名ト風貌ヲ忘却セラレタル無キノ一事ハ亦以テ奈何ニ店員ニ接スルニ温情ヲ以テセラレタルカヲ知ルニ足ラン實ニ氏ハ德ノ人タリ德望ヲ以テ店員三千ノ多キヲ率キラレタルナリ近時上下德疎ンジ情薄ラギタルノ時鈴木獨リ家族温情ノ美風ヲ以テ天下ニ誇ヲ爲シ得ルモノ

同氏人格ノ反映ニ歸スト謂フ可キ乎而モ財界多端氏ニ負フ所ノモノ倍々多キヲ加フルニ當リ我鈴木商店ハ爰ニ偉大ノ人士ヲ失フ氏年ヲ享クル四十有七尙春秋ニ富ム向後大ニ氏ニ期待スル所尠カラズ何ゾ一ニ鈴木ノ損失ノミト言ハンヤ噫悲シイ哉今ヤ幽明境ヲ異ニス天ニ訴ヘ地ニ哭スルモ更ニ應フルナク昨ノ温顔今何處ニカ見エム哀悼何ゾ堪フ可ケンヤ爰ニ神戸本店々葬ヲ以テ氏ノ葬儀ヲ營ムニ當リ我ガ臺灣支店亦謹ミテ追悼ノ會式ヲ行フ在天ノ靈冀クハ髣髴トシテ來リ饗ケヨ

大正九年五月二十三日

合名會社鈴木商店
臺灣支店店員總代

平 高 寅 太 郎

故西川文藏君追悼會

(大阪北濱つる家ニ於テ施行)

祭

文

維時大正九年十月十三日同窓ノ舊友等茲ニ壇ヲ設ケ清酌庶羞ノ奠ヲ以テ故脩
竹西川文藏君ノ靈ヲ祭ル君夙ニ滋賀縣商業學校ニ學ビ業卒ヘテ更ニ笈ヲ東都ニ
負ヒ後神戸鈴木商店ニ入ル爾來二十有餘年恪勵精勵常ニ帷幄ニ參シテ克ク其重
職ニ當リ十年一日更ニ懈ルコトナシ而モ資性温厚ニシテ清廉己ヲ持シ寬裕衆ヲ
率キ從容嘗テ人ト爭フコトナシ宜ナル哉聲望大ニ揚リ令聞斯界ニ噴々タリシコ
トヤ君又書畫骨董ヲ愛シ靜居時ニ香ヲ點シ茗ヲ烹テ怡然トシテ翰墨ニ遊ブ風懷
高雅鑑識既ニ超凡ノ域ニ入ル牙籌匆忙ノ傍綽々此趣味ヲ樂ミ又常ニ現代ノ趨勢
ヲ察シ犀利ノ眼ヲ以テ博ク百卷ヲ涉獵シ苟クモ新知ヲ攝取スルヲ怠ラズ同人推
シテ畏友ト爲ス天若シ假スニ更ニ壽ヲ以テセバ必スヤ圓熟大成シテ廣ク立志ノ
範ヲ揚クベカリシニ嗚呼不幸ニ豈ノ冒ス所トナリ齡未ダ知命ニダモ達セスシテ
空ク幽冥ノ境ニ入ラル痛惜奚ソ堪ヘン茲ニ同窓ノ舊友等相謀リ俱ニ會シテ謹テ
英靈ヲ祭リ恭シク冥福ヲ祈ル精魂彷彿トシテ來リ饗ケヨ

尙商會阪神懇話會

總代 吉 田 熊 太 郎

新聞雜誌記事

大阪毎日新聞

(五月十六日)

神戸合名會社鈴木商店支配人として實業界に重を爲して居た西川文藏氏は、二ヶ月以前から胃潰瘍にて引籠り、靜養中一時餘程快方に向ふて居たが、十四日夜から急に容體が變り、十五日午前十一時過ぎ終に逝去、享年四十七。

神戸又新日報

(五月十七日)

當市鈴木商店支配人西川文藏氏(四十七歳)は胃潰瘍を病み中山手七丁目の自宅に療養中十五日午前死去せり、氏は鈴木商店に入りて勤續廿有七年に及び資性温厚得がたき名支配人なりき、葬儀は二十三日午後一時下山手通七丁目善福寺にて店葬を以て執行の筈。

神戸新聞

(五月十八日)

鈴木商店支配人西川文藏氏は二ヶ月程以前から胃潰瘍を病んで自宅に靜養し

て居た、爾來氏は漸次快方に向ひ靜かに起居をなすに至る迄全快に近づき已に全快祝の準備最中であつた、然るに十五日朝來急性腹膜炎を併發した、松永主治醫を信すること頗る厚かつた西川氏も、遂に中西博士と西博士の診察を受くることを首肯した、だが時機は已に遅く中西博士の急診を受くるに到らず夫人の腕に凭れて終に永眠したのである、鈴木商店の首腦金子、柳田の二氏を始め森支配人以下の舊知は悉く末期の水を捧げたと云ふ、西川氏の生前鈴木商店に對する働き振りは頗る熱烈に且奮闘的のものであつた、就中氏が一般社員に臨むや頗る友情に富み益暮の賞與の如きは状袋のまゝで部下に配分し自分は決して持つて歸らなかつたと云ふことである、鈴木商店の今日ある無論氏の努力も與つて大なる力がある、鈴木商店が店葬の禮を以て氏の最後を飾らうとする無論當然のことである。

大正日々新聞

(五月十八日)

古書畫と葉卷

逝いた西川氏の事

西川文藏氏の逝去は鈴木商店に取つての打撃の最大なものである、四角八面に

猪突的の手腕を揮つて、行くとして可ならざるなき金子氏を助けて、世界的に雄飛しつゝある今日の鈴木王國を形成するに至らしめた一事は、實に同氏の功績に歸せねばならぬ。

○明治二十七年東京高商を卒業して同商店に入つたが、其頃の鈴木は内海岸通四丁目に在りて未だ極めて微々たるものであつた、金子、柳田兩氏が主として外交に膺る一方に於て、氏は江州商人の血を享けた冷靜にして温厚篤實な性質から着々内部の整理を圖つて、金子氏をして何等内顧の憂なからしめたのであつた。

○氏は又同僚なり部下に接することの親切で温情の籠つて居る點から常に敬慕の的となつて居た、或は個人々々に對する周密な注意、苦境に在る人の救濟又は苦學生を引取つての世話など、美談は枚舉に遑ない程である。

○氏の趣味は古書古畫の多くを藏して繁雜な商務の側ら之を愛翫すると云ふ位に止まつて居たが、逸品も頗る多い模様であつて、別して崑山の傑作が多く蒐められて居る。

○其他道樂としては葉卷を嗜好した點である、實際氏のデスクの中にはハバナ

の上等から馬尼刺埃及等に至るまでの十數種を納めて、徐ろに紫煙を吐いて匆忙裡の小閑を樂んで居た。

○蜘蛛の巢の糸のやうに入方に手を擴げた鈴木商店の各部から、山の如く堆かしく積まれたコツピーや書類を前にして、細大漏さず之を整理して些の遺漏なからしめた頭腦の明晰には、常に傍人を驚嘆せしめて居たものである。

○殊に華美を競うて兎角世上の反感を蒙りつゝある實業家中に在つて、氏の如き高潔な人格の士を失つたことは、獨り鈴木商店のみの損失ではないのである。

大阪朝日新聞

(五月十九日)

逝ける西川文藏氏

氏は鈴木の柱石であつた

胃潰瘍にて去る十五日、四十七歳を一期とし逝去した鈴木商店支配人西川文藏氏は滋賀縣の人、明治廿七年東京高商を出で、外國貿易に志して神戸に來り、鈴木商店へ入りて以來茲に二十七年間、終始一貫誠心誠意克く活動した、鈴木商店が今日の盛大を致せる、氏の内助の功に歸すべきもの決して尠くない、氏は温厚篤實、店務

に精勵恪勤、其人格は高潔であつた、されば店員には尊敬せられ、世間からは信用を得て居た、即ち氏は鈴木商店の爲に身を以て殉じたのである、鈴木商店重役金子直吉氏は西川氏の死去を惜み、店の長男を死くしたとて非常に落膽して居る、二十三日午後一時市内下山手通七丁目善福寺で店葬を行ふ由。

大和新聞

(五月十九日)

神戸鈴木商店支配人西川文藏氏は胃潰瘍を患ひ、中山手通七丁目の自宅に療養中なりしが、十五日午前十一時死去せり、氏は四十七歳の今日迄二十七年間勤続同店の一重鎮たりしに惜むべし、葬儀は二十三日午後一時自宅出棺下山手通七丁目善福寺に於て店葬として執行の由。

大阪新報

(五月廿二日)

西川文藏氏 高風之士

東都一つ橋を出て、より爾來二十餘年間、誠意一貫現在の盛大を見たる鈴木商

店の柱石たる、逝ける同店支配人西川文藏氏の店葬を、二十三日午後一時より、神戸市下山手通七丁目善福寺にて行ふ可しと。

氏は今日の實業界稀に見る人格者にして、其趣味の一端として常に國士風の書畫を愛し、寧日無き執務の傍、一抹の香煙裡に趣味を遣る底の高風の氣を帯びし、獨り一鈴木商店の痛惜するのみならず、心ある扇港實業家に在つても同様、哀惜措く能はざるものありと云ふ。

東京夕刊

(五月廿二日)

噫々西川文藏君

神戸鈴木商店總支配人故西川文藏氏の葬儀は、明廿三日、同市下山手通の善福寺に於て、社葬を以て壯嚴に行はるゝに決した。

○會葬者は關西一流の紳士縉商、並に鈴木商店本店在勤者の全部と、内國各地に散在する支店員總代、及鈴木商店の系統に屬する諸會社の代表者無慮二千名が、午後一時から三時迄の間に焼香する順序だと云へば、神戸市に取り近來稀に見る盛

大な葬儀であらう。

○故西川文藏君は白哲にして隆準、廣額、極めて物優しき風采を備へて居たが、頭腦明晰計數に長じ、而も几帳面で其日々の事務は屹度其日の中に片付ける、毎日毎日接手した手紙は必ず自ら筆を執つて其日の中に返答を出す、秘書役の如うな書簡係が西川支配人の身邊に附隨し始めたのは、漸く一兩年以來のことである。

○日清戦争の年に鈴木商店に入つたのであるが、當年の鈴木たる固より渺たる一商店に過ぎぬので、店員とても今の重役金子直吉、柳田富士松氏等を除いては、半は頽齡の人半は枯骨と化し去つたのであるが、自分の聞知した限りに於ては、故西川文藏君は組織的な商業教育を受けて入社した最初の鈴木商店員である。

○自分が西川支配人を知つたのは明治三十八年の秋で、鈴木の資力は今の百分の一位、店員の數も現在の三十分の一内外のものであつた、爾來十有五年、自分の神戸に行く度毎西川君を訪ふを例としたのである、年々歳々金子君等の西川君に對する信用が幾何級數の割合で増進するのを自分は感得せず居られなかつた、局外の眼にすら金子君の後を襲ふものは西川君であるかの如くに映じ始めたので

あるから、鈴木の内にも同様の観察を抱いた者は少くあるまい、此の有爲の人が働き盛りの四十七歳を一期に、志を齎して胃潰瘍の爲めに斃れた、洵に惜むべき限りである。

○精勵恪勤の君が病褥に呻吟しても、緊急の外電や重要文書を閲して、死の魔手の近づくを知らず顔に、最後まで鈴木商店の爲めに盡した、鈴木は如何にして君の功勞に酬いてあらうか、世人の具瞻する所は即ち是れである。

○書畫の鑑識に長じ、繪畫には深い趣味を有つて居たが、數年前其珍寶逸品を賣立てして、其藏品の豊富に人を驚かしたことがある。

○鈴木よね刀自が、數年前須磨の大手なる村野山人邸を買受け、新に土木を起して本邸を造營し、其新築祝に神戸一流の富豪を招待した折、宴酣にして鈴木よね刀自は金子、柳田兩重役西川支配人等を従へ、お盃頂戴に宴席を一巡りしたことがある、某氏との獻酬の間に「世間では鈴木の今日あるは金子一人の力であるかの如く自しまするが、隠れた功勞者は此の西川であります」と推奨したことがある。

○然り商傑金子氏ありと雖も、内に西川君あつて守備の大任を完うするに非ざ

れば、金子、柳田氏等は十二分に其手腕を外に伸ばすことが出来なかつたに相違ない、嘗に西川君が鈴木商店内に於ける學校出身派の頭目として信賴された許りてはなく、守備の名將を喪うた點から見て、鈴木の一大損失であると共に、同商店の存在する限り西川の名は永久不滅であらねばならぬ。

關西日報

(五月廿三日)

合名會社鈴木商店支配人西川文藏氏は、豫て病氣に罹り神戸市中山手通七丁目の自邸に於て療養中なりしが、手厚き醫師の手當も其甲斐なく、去る十五日永眠したるを以て、明二十三日午後一時より、途中葬列を廢し、神戸市下山手通八丁目善福寺に於て葬儀を執行する由、氏は滋賀縣の人、東京高等商業學校に在學中故あつて中途退學し、明治二十七年鈴木商店に入り、累進して支配人となりたるが、此他日本金屬、帝國汽船の取締役に勤め居れり、享年四十七、惜むべし。

大阪朝日新聞

(五月廿四日)

鈴木商店支配人たりし故西川文藏氏の葬儀は、社葬を以て廿三日午後一時より

善福寺に於て執行、葬主として鈴木岩治郎氏の弔辭に亞ぎ、森支配人の職員總代、鈴木岩藏氏の濟美會長、金子直吉氏の友人總代としての弔辭あり、本願寺連枝今小路覺尊師其他十數箇寺の讀經の中に焼香を終りたるが、近頃の盛儀なりき。

大阪新報

(五月廿四日)

鈴木合名會社支配人故西川文藏氏の店葬は、既記の如く廿三日午後一時より、神戸下山手通善福寺にて、本派本願寺連枝今小路覺尊師大導師の下に執行せられたるが、讀經に先立ち各地官民有志よりの弔電朗讀されたり、當日の參列者は無慮八百名に達し、中には貴族院議員服部一三氏外知名の士多かりし。

大正日日新聞

(五月廿四日)

故鈴木商店支配人西川文藏氏の葬儀は、二十三日午後一時より、神戸下山手通八丁目善福寺に於て舉行し、本願寺連枝今小路覺尊師導師として、神戸、和歌山、山口、奈良、滋賀の各地末寺の住職數名を率ゐて着席、讀經其他壯嚴なる佛式の儀があつて、葬主鈴木岩治郎、同商店職員總代森衆郎、濟美會長鈴木岩藏、友人總代金子直吉諸氏

の弔辭、親戚其他參列者一同の焼香等があつて、午後三時儀式を終つた、此日の參列者數百名、稀有の盛儀であつた。

濟美寮誌

(第參拾四號 大正九年五月廿二日)

西川支配人の逝去を悼む

當店支配人西川文藏氏病を以て忽焉長逝せらる哀哉、氏元來壯健にして病を知らず、勵精恪勤終始渝らざりしに、去三月不幸二豎の冒す所となり、爾來自邸に在りて専ら靜養に力められしが、經過頗る良好なりと聞き回復の一日も速かならんことを祈り居たりしに、何ぞ圖らん本月十四日腹膜炎併發の爲め病狀急變し翌十五日終に逝去せらる、氏は天資温厚身を持すること謹嚴、平生故舊親朋に厚く、人を知りて善く任ず、氏の訃音一たび傳はるや三千の職員歎歎して哀惜せざるものなし、又以て氏の德望高きを知るべきなり、明廿三日を期し當地善福寺に於て店葬を行はれんとするに方り、氏が高潔の人格と清秀の風采とを想望して哀悼の情更に切なるものあり謹んで弔す。

西川支配人を追悼して英詩を思ふ

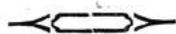
Let not Ambition mock their useful toil,
Their homely joys, and destiny obscure;
Nor Grandeur hear with a disdainful smile
The short and simple annals of the poor.
The boast of heraldry, the pomp of power,
And all that beauty, all that wealth e'er gave,
Await alike the inevitable hour:—
The paths of glory lead but to the grave.
Nor you, ye proud, impute to these the fault,
If Memory o'er their tomb no trophies raise,
Where through the long-drawn aisle and fretted
vault
The pealing anthem swells the note of praise.
Can storied urn or animated bust
Back to its mansion call the fleeting breath?
Can Honor's voice provoke the silent bust,
Or Flattery soothe the dull, cold ear of Death?

濟
美
寮
誌

(第四拾號 大正九年七月三日)

1110

(グレ = の 詩 一 節)



故人言行の片鱗

(一) 偉人に逸話無し

金子直吉

森君から亡友西川君の逸話を書けと命ぜられたけれども、西川君に逸話のあらう筈が無い、若し有つたらば西川君は決して尊むべき人で無かつたらう。

抑々逸話と云ふものは、小賢しい人が俗人を欺く爲に行つて見せる芝居の一幕である、即ち西川君はそんな芝居などをして人を欺く小才子で無く、最尊敬すべき紳士であると同時に、極めて誠實な事務家で、商賣も可なり上手であつた、強ひて西川君の行つて居た事を形容すれば、孔孟の教にある様な君子が、澤山の子弟を率ゐて最も六ヶ敷商賣を圓滿に有利に行つて居た様なものである、逸話や奇談に富んで居る人は眞に偉い人で無い、實は平々凡々の代物である、本當に偉い人は何等の奇談も逸話も無く、其全生涯が一團の逸話であつて、其平生が頗る眞面目で獻身的で、一生を通じて何處が勝れて居ることもなく、只美質に富んで尊むべく慕ふべき所が多く、恰も雨露が植物の生育を助ける如く、洪大無邊の恩惠を感ぜしむるもので

ある、即ち西川君の偉かつたのは全く之に恰當するからである、西川君の有難い處勿體無い處は全然茲に在りと斷言する、故に逸話や奇談が有つたら、反つて西川君死後の餘榮が薄らぐ譯である。

西川君が鈴木商店へ來たのは明治廿五六年であつて、神戸取引所の戸田忠主と云ふ人が先代の主人に頼んで、先代の主人から小生に貴様の方へ使つてはどうかと言はれた、小生は只今人は餘つて居るから要らないと答へた處が、先代主人がまゝ會うて見ろ眉目優秀くつきりとした良ささうな男であるぞと言はれて、即ち小生が擔當して居つた樟腦店へ雇ふこととなつた、餘談ではあるが、先代主人は人を見るの眼識が高かつた、扱入店して見ると、體格は蒲柳で、上品な御大家の息子然たる勤勉な誠實な事務家であつて、小生が遣り散らかした商賣の跡仕末を、悪い顔もせず日々都合好く片付けて呉れた、又其頃から明治四十二三年位迄、小生の手紙は大抵小生が口授して西川君が書いたもので、事實を知らぬ人は之を小生の筆蹟と思つて、小生の達筆を稱揚した人もあつた、其頃の西川君は、只正直に従順に事務を取つて、商賣には趣味が無い様に見えて、後年あれだけ商賣に練達しようとは思はな

かつた、明治二十九年の頃、西川君の叔父某が死去した處、西川家の全財産が悉く抵當に這入つて居ることを發見した、其頃迄西川君の家は、西江州で有數の資産家の積りで居つたさうなが、是れに由つて一家一族皆驚倒した、西川君は之が爲に一時鈴木を退店して歸郷することゝなつた、此時西川君は書面で小生に善後策を問はれたから、小生は全財産を賣つて借金を片付けろと答へた、西川君は其通り實行したらしい、其後小生が西川君に書面で、田舎の草深い處で暮すも一生、神戸の様な萬國の人を相手とする處で暮すも一生、同じ事なら小生と共に神戸で悪い事をして暮さうではないかと言つて遣つた處が、西川君之に應じて再び神戸へ來て、あの如く死ぬ迄我商店の爲めに奮闘努力したのである、支那の古い寺へ行くと必ず煤けた佛像が在る、其佛像には一向直打は無いが、其眉間とか腕とかの要處々々に、色々の寶石が嵌込んであつて光輝を放つて居る、我鈴木商店に西川君が居たのは、丁度此佛像の頭に嵌めてある寶石の様なものであつたらう。

○西川君をおもふ

未亡友人

白

鼠

世の中に似たもの一つ雨後の月

○絶筆に對し

同

人

梧桐の散りさうに無き葉色哉

○寫真に對し

同

人

衣更へて咳する音の忍ばしき

(二) 噫 良 支配 人 柳 田 富 士 松

自分と西川君とは舊い同僚であるが、君の入店後明治三十一年に家庭を持たれる迄は、君の行事に付て一切知る所がなかつた、其れは君は主として樟腦の仕事を担当せられ、自分は専ら砂糖の仕事を担当して居たので、顔を合せて篤と話をすれば、様な機會が全く無かつたからである、殊に自分は、前後二回で一年位支那に行つて居り、又下關に居つたこともあり、其後も殆ど毎日大阪に行つて、大部分同支店で仕事をした關係から、舊い同僚であるにも拘らず、君の事に就て語るべき何等の材料を持たない譯である、併し君は、店員が少數であつた時代から、店員中一頭地を抽い

て居たことは事實で、至極實直な、金子氏の女房役として最適當な人として、自分は考へて居たのである。

當時君は山口氏の令嬢(現未亡人)と結婚したしこのことで店主へ相談せられ、自分は店主から相談を受けたが、君の如き眞面目な人が撰擇せられた人なれば、必ず良縁であるに違いないと言つて、一も二もなく同意したことである。

明治三十五年十月に店は合名會社組織になり、同四十一年二月支配人選任の場合に、金子氏から君を支配人にしてはと相談があつたので、其れは最適任者であらうと言つて、自分等一同賛成したのであるが、支配人として君の如き、温厚にして澹泊、誠實にして恪勤、練達にして公平な人を得たことは、洵に店の至幸であつた。

然る處我國は前には、國力を賭して戦つた日清戦役や日露戦役に大捷し、後には歐洲大戦にも參加して克く聯合國共同の敵を屠り、斯くて國威の宣揚を見たのであるが、翻つて我鈴木商店も、爾來店主の恩眷の下に、金子氏を初め店員一同が、協戮一致して奮勵努力した結果、店運は次第に發展隆昌の域に進んだ、世間には、店が盛大になつた爲に、支配人其人の鼎の輕重を問はなければならぬことになつて、更迭

を要した例は乏しくないのであるが、店では絶えて左様の心配が無かつた、十數年間を通じて支配人であつた君の技倆は、盤根錯節に遭遇する毎に愈々益々顯はれて、萬般の店務變理其宜しきに合ひ、適れ大鈴木商店支配人として恥しからぬ効績を挙げられたのは、他に餘り例の無いことであつて、特筆に値するものと信ずる。

君が病氣で靜養中、自分は四五回見舞つたが、最初は甚だ弱つて見えただけでも其後會ふ度毎に快方に赴かれたので、大に喜んで居た、君は無論自分等も、あゝ急に病狀が變つて易簧されやうとは思ひも寄らなかつた事である、易簧の數日前であつたが、からだの工合が宜しいから、六月一日には出勤したいと思つて居るとさへ話されたので、自分は其れは結構だが、大病後押しでの出勤で逆戻りなどしては大變である、仕事は森君等が代つてして居る譯であるから、一寸顔を出される位ならば格別、決して出勤を急いではならぬ、充分宅で養生せられたいと警告したのであつた、然るに五月十五日の朝、森君が金子氏と自分とが居る事務室に來られての話に、今西川さんから電話がかゝり、店の事につき相談したいから來て呉れとの事、そこで森君に行つて貰ひ、金子氏は他の用事で外出された、處が又電話があり、意外に

も西川氏は危篤だとの事で、大に驚かざるを得なかつた、取るものも取りあへず急いで出かけた、嗚呼危篤………瀕死、自分は先刻電話の意味も判つたが、何等言ふ所を知らなかつた、頃刻の後君は早や此世の人でなかつたが、枕邊には、夫人と小供達と西川文之助氏が居られた、自分と森君とは辛うじて臨終に會ひ、そぞろ肉親の兄弟に訣れた感じがして、熱涙の下るを覺えなかつたのである。

自分が永い年月の間に、西川君と旅行を共にしたのは、大里製糖所が設立された際、金子氏と三人で大里へ行つた時だけである、其れも汽船で行つて、翌日の晩に、汽車で直ぐ神戸に歸つた様な譯である、君は滅多に旅行しなかつた、偶々しても頗る忙しい短日子の旅行に過ぎなかつた、又君は書畫其他高尚な趣味を持つて居られたが、其爲に、勤務時間を缺くやうなことは決してなかつた。

入店以來二十六年の久しい間、唯忠實に勤務して終始渝らなかつたことは、店主を初め一般の深く感謝して居る所である、自分は、今後君の行を學んで、黽勉事に従ふ人が益々多からんことを祈るものであるが、此れは、其人一生の利益であるのみならず、店の爲にも國の爲にも誠に結構な事と思ふ、其れでこそ繁昌するのである。

(三) 主治醫として 松 永 榮 吉

西川文藏氏を失うた時程、深刻に悲哀を感じたことは無かつた、氏と余とは十數年來の昵懇で、殊に其家族並に親戚の中には、殆ど三十年も親しくして居る人もある、家庭に於ける西川氏は、誠に温厚篤實にして又謹直謙遜の人であつた、同家使雇の者に對し、又出入の人に對しては、親切で同情の厚い方であつた、兎角世間には自分の財産が富裕になり、社會的地位が向上するに従ひ、兎角高ぶりがる傾向を有する人が多いが、西川氏にはそんな事は少しも無く、十年前も今日も同様であつたことは、其謙遜の徳の致す所と常に敬服して居りました。

さて同氏が此度病氣に罹られてより、日々御見舞して居りましたが、其日常の動作を見て、彌其人格の高潔なることを知りました、平素より瘦せた體格をして居られたが至極壯健で、今迄は之といふ病氣に罹られたことも無かつた、朝は早く店に出勤し、夜は晩く歸宅して、日曜日も殆ど休さては無く、能く身體が續くことかなと

家人も驚く程の精勤でした、偶々一ヶ月に一度位にても日曜日の休があれば、愛らしき御子女達の總てが慈父の身邊を取圍みて、樂しげに遊んで居らるゝことを見受けました、昨年九月頃より何となく、消化不良食物停滯の心持が起りましたが、胃病ならんと思ひ餘り意にも介せず、時々服藥する位にて相變らず精勤して居られたが、漸々瘦せて來る様子ですから、十二月十二日、縣立神戸病院内科醫長西廣吉氏の診察を受け、其指圖に従うて養生せられました、次第に病氣も宜しくなり、身體も丈夫になるのを覺えて參りましたが、何分多用に取紛れ藥も忘れ勝ちになりました、た、本年三月頃、どうも昨今再顔色も悪く、瘦も目立つ様であると聞きましたから、丁度同月二十日診察して見ると、驚く計り顔色悪く、強度の貧血で瘦も増進してゐましたから、能く調べました處、他に異狀も無いが、大便を檢查すると全く血便です、から、これは胃潰瘍であらうと思ひ、早速西學士の診察を受けましたが、矢張同じ意見で、絶対に安靜にして流動性食物を攝ることゝし、四日毎に西學士の診察を受けて、嚴重なる養生を爲すことゝなりました、然るに當時、氏の謹直なる性質に對して、相當の人格を具へたる看護婦を得ることが困難でありましたから、令室が日夜病床

に付き切りて、十分の看護をされ、總て醫師の勸告を守り、用意周到に養生せられた。其爲に経過も宜しく、血便も暫時にして止み、食氣も進み、五六週間にして貧血状態も回復しましたから、漸次半流動性食物に移り、室内だけ動くことを許し、縁端に卓と椅子を置き、書見を樂みとして一日を送り、時々店の要談等も出来る様になり、稍愁眉を開きました。然るに五月十四日午前十一時頃、例の如く縁端の椅子に凭りて書見中、下腹に少しサシコミが起つたので直に蓐中に入られたが、横臥も出来ず唯靜に坐して居る中に、次第にサシコミが強くなる様子ですから、電話で私を呼ばれました。早速診察しますと、蓐中に端坐し、如何にも苦しげに額より冷汗を流して居られた。體温にも脈にも變化は無かつたが、下腹部殊に左側に於て硬くなり、緊滿して居り、壓すると疼痛がありました。診察して居る中にサシコミも穩かになりましたが、尙横臥が出来ないで脇息に靠れて坐して居りました。排尿させて見ましたが、少し許り出た。其時身體を移動した爲に再サシコミが起りましたから、對症療法を施して沈靜しました。急使により西學士も午後三時頃來られて、合議の上適應の處置を施しましたが、其後はサシコミも起らず、午後五時及九時の再度の診察

の時は、餘程平穩となり熱も出でず、此儘眠られさうなと一二の談話も出で、微笑さへ湛へ何の異状も無かつた、然るに翌朝八時頃診察しますと、昨夜は眠られ無かつたがサシコミは其後來ないと言はれましたが、どうも顔色が悪いから、心配して脈を檢すると、甚微弱で其數も多かつた、さては心臟痲痺の前兆かと驚き、強心藥等を注射し、直に西學士を迎へ、鈴木商店へも報知しました、西學士も早速來られ、尙も強心藥及食鹽水等の注射を施し、百方術を盡しましたが、回生の望なく、午前十一時十五分、眠るが如く令室の膝を枕として遠く逝されました、此慘まじき現狀に泣くにも泣かれず、茫然自失する計りでした、吁。

元來腸痙攣後の痲痺より腸重疊症とか捻轉症とか起り、急性腹膜炎を發し、心臟痲痺の轉歸を取ることは往々あることですが、斯の如く病が軽くして、其變動の餘りに急劇なことは稀であります、勿論當時は先輩の意見をも聞き、私の最善を盡した積りでありますが、今より追想すれば何故前日に外科的手術の斷行を勧めざりしか、又何故前日無理にも看護婦の附添を勧めざりしかを後悔します、況して遺族及友人諸氏に於ては尙一層残り惜しく思はるゝならんと、斷腸の念禁ずることが

出来ませぬ、其れ故此追懷録の御編輯を機として、當時の病狀經過の概略を記して諸氏に示すことは、故人に對する私の責務であらうと思ひ、不文を省みず此稿を草した次第であります、温厚篤實にして謙讓の徳に富み給へる、敬愛する西川文藏氏は遠逝されたけれども、其徳は御遺族の間に永遠に留つて、慰めとなり力となり、又故父君の志を繼ぐべき御遺兒の將來を照す光とならんことを切に祈ります。

(四) 誠 實 の 人 西 廣 吉

西川文藏氏に初めて面會した時、誠實の人と直覺しました、其病氣に就て養生法など善く嚴守せられた、何事も規律正しき人と知つた、且温雅なる風格、明瞭なる頭腦であつた、其同僚間に尊重せられて居たことは實に尤もの次第と思つた、齡未だ知命に達せず、是れからと云ふ有爲の人物を失つたことは、社會の爲め甚だ遺憾千萬と思ひます。

(五) 思ひ出るまゝ

吉田熊太郎

今はたゞ涙なりけり、おのれ始めて西川大人と知りしは、明治二十年の春、琵琶湖のほとりなる滋賀縣商業學校の校庭に相見えつるよりにして、其後三とせが程は朝な夕な、同じ窓邊に道をいそしみ、春は長等の山の花吹雪に立ちて、行末の幸を語りあひつゝ、若き血を涌かせ、秋は三井寺に月を踏みては、古へ人の教を聞きて心の玉を磨きつ、雨にも風にも、今ひとりの大音ぬしと深くも交ひて、影の形に添ひたらむが如く、出るも入るも、共に手を携へて陸みあひてしかば、いつしか三人組の仇名さへ誰れ彼れに設けられて、やがては螢の光の歌に送られて、校門に袂を分ちての後も、結ぶ盟は彌堅く、鼎の足のそれのごと互に助け輔けむと、三十路にあまる年月を常に親しく往來して、吾は杖とも柱とも君をし深く頼みてしかひもなく、あはれ心なき夜半の嵐になどや脆くも誘はれ給ひけむ、吾等二人を振り棄て、世を早め給ひしこそ洵に哀しとも悲しき限りなりけれ。

おのれ君が病の床に臥し給ひしと聞きて驚き訪れし折は、聞きたりし程もなく
て、さして衰へ給へりしさまもなく、君も亦日ならず快からめと、何くれさうち語ら
ひておはせしかば、いと心も強くて、其後のたよりに日に癒えさせ給ふこと
のよしをのみ聞きてければ、心安く過せしに、たゞ一日二日ばかりのうちにかばか
り變らせ給ひて、冥路遠くかしまたせさせ給はんとは、いかでか思ひかけてむ、か
ほど親しく契りてしを、其最後にも得逢はで、徒らに空蟬のなきからに涙のみそゝ
ぐことのいかばかり悔しかるべき、よしそれも天津神々の定め給へりしことなら
むには、せめてはいかにして君が御靈をや慰めまつるべきと思へば、夢にも面影の
ほの見えて、はては御聲さへまざまざと聞きなさるゝ心地するぞいよいよ悲しき。
君は少かりし時よりよろづ秀でさせ給ひ、學びの園に在りし日にも、常に同じ級
の中に頭立ちておはせしが、わきて數まふ道には、二百に餘るもろもろの學び子の
其中に抜きんでゝ、いとも優れさせ給ひ、世にも稀れなる秀で人よと皆人に仰がれ
給ひぬ、されば世に出て給ひて後も、商ひの道に敏く、事を裁くに立板に水流したら
む如くよろづ滞ることもなくて、人々に重くもてはやされ給ひしもことはりや、況

して三十とせの永きに、一日とても私ことさのさはりに勤を怠らせ給ひつること
てはなく、日曜日にも日の半は必ず店に出て、何くれと事を理め給ひしは、學び子
の昔雨にも雪にも勉め勵みて、たゞの日も怠らせ給はざりしにも思ひあはされて
まことに世の鑑とも見るべき恪勤の性なりけり。

君また深く書畫骨董の類を愛てさせ給ひ、鑑識の道にも暗からず、暇あれば古へ
人の筆の跡を友とし給ひ、さうしにはいつも花を活けよきたきものを薰らせなど
して、よろづ風雅の道を楽しみ給ひ、又常に筆のすさびの道をいそしみ、新らしき書
籍など悉く讀み給ひて、深く身を修め神を養ふことを怠らせ給はざりしが、これと
てもいと少かりし時より嗜み給へりしことにて、寄宿舎に在りし同じ輩の、時に詩
を吟ひ亂舞などしてうち興ずる中に、深くさうしに籠りては、石摺せる偉人の筆の
跡など繙きて、獨り靜に娛めりし十三四の少年こそ君なりけれと思ひ合はせては
まことに梅檀の二葉の古語も思ひ出でられて、其頃より早もなみなみならずおはせ
しが、君いと言葉少く、常に人と事を論ふことも稀にして、ましてや聲を勵し言ひ争
ひ給ひしことなんと絶えてあらざりけれど、たまたまの一言二言も皆人に重く聞

きなされて、よく用ゐられ給ひしも、まことに勝れたる徳もたせ給ひししるしなり
けむ、また友を懐ふ心の厚かりしは世の人に優れて、心ばへいと温く、深く交らう友
がきには常に何くれと心をつくさせ給ひしのみか、あまり深からぬ輩よりとても
たまたま頼み聞ゆることしあれば、必ず快く諾ひて、絶えて否み給ひしことゝては
なく、世に出て給ひて後も、多くの友を薦めて後見させ給ひしも限なく、數ある同胞
達をも常に愛しみ給ひて、おほかたの教育なども身一つに引受けて導き果たさせ
給へりしなど、まことになみなならず美はしく優しき心なりけむ。

君はかくよろづ優しくおはし給へれど、事に臨みてはいと心も強くて、きはめは
たさせ給ふこといと潔く、靜にその善惡をきはめて一度かくと思ひ定めたらむに
は、いさゝかためらふこともなく取り行はせ給ふ性なりけり、凡そ世の人の常とて
日頃愛で玩べる寶などは、わきて思ひすて難き習なるを、さいつころ日頃年頃蒐め
藏へて愛でさせ給へりし、かざかざの世にも得がたき寶古き繪などを、思ふよしの
あればとて悉く他人に譲りはて、いさゝか惜しとも思はせざりしなど、なかなか常
の人には爲しがたきことにて、なべての道にも常にかく潔くおはせしぞ、事をはた

せていつも善き實を獲させ給へりしもことほりなり。

君常に自ら薄く身を持たせ給ひて、絶えて奢り驕らせ給ふことなく、よろづつゝまやかに、今も昔に變らて故き人々にも譲り謙りて、いと心易く交らひ給へりしかば、いづれもよく親み、かまぎ賞へぬぞなかりき、實に君こそは圓滿有徳の君子とや謂ふべかりけめ、吾は君を秋の月の高く清らかにして圓かに輝けるにや較べまし君常に竹を愛てさせ給ひて、園には之を多く栽え藏へ給へりし、桂幅などにも竹を畫けるが殊に多く、又自ら號けて脩竹となむ呼ばせ給へりしが、洵に其行の正しくて心の直ぐなること竹の如くなりし、性こそ常の嗜みにも顯はれたりけめ。

君こそし四十七歳のさかりもて空しく果て給へりしが、猶幾とせかいやさかに榮えましたらむには、世のため家のためかずかずの功蹟も多からましを、かりそめのいたつきに世を早め給ひしこと、かへすがへすもいと口惜しくて、あはれ鼎の脚の一つ折れて、残る二つは如何にして立ちもやせんと思へば、又も涙のみせきあげて、しぼる袂のひまなきこそ誠に悲しとも哀しき限なりけれ。

なけゝともよへとも今は空蟬の

なき世の人をおもふかなしさ

百とせのさかりをこそ思ひけれ

なとなかはにもたらてゆきけむ

かきくらし降るさみたれの束の間も

はるゝことなきわかなみたかな

やすらけくとはのねむりにいりし君

たまはほとけの邊にかよふらむ

いまははや逢ひ見んこともかた岡の

夜半のけむりとなりしきみかも

けふや夢きのふやうつゝきみかため

たむけの清水くむ身かなしも

三つの脚たりてこそあれなとやこの

かなへの一つ折れはてにけむ

あすよりはなにを頼まむ手なれこし

杖うしなひしめしひならなくに

うつし繪にむかへはきみはほゝえみて

かたりますかも聲のきこゆる

思はしと思へとなほも思はれて

またおきまさるそての白露

君が徳風を近江の名所の四季にしぬびてよめる

温 厚

長等山みねふく風ものさかにて

しつこゝろなくちる櫻かな

寛 宏

もゝ川の水を集めてひろひろと

波しつかなり鴉のうみつら

雅 懷

月きよき三井のましみつ秋さひて

塵も留めすすみまざるなり

高 潔

くれのこる比良のたかねの白雪は

きみか心のかたみなりけり

(六) 追

懷

淺田泉次郎

昔嗜好せられた煙草

西川さんの煙草好きは有名なものであつたが、煙草が專賣になる前に「ストレッツトカツト」ご云ふ舶來の兩切煙草があつた、赤と萌黄色の絹布で體裁よく包まれ、十本入の値段が其頃たしか二十錢？と記憶する、其れが非常に嗜好に適して居つた、實際風味のよい煙草であつた。

明治三十六七年の頃、未だ店は内榮町四丁目に在る時代、至つて舊式の店舗で疊敷に結界構へと云ふ有様、其時分には金子さんを直吉さん、柳田さんを富士松さん、西川さんを文藏はんと呼んで居た、そして直七さん(喜多奈良七氏)重助はん(加藤重俊氏)等家持通勤の番頭はんは、交代で毎夜店へ宿直に來られて居た、當時店に寢起をして居る若い者仲間、ひとしきり角力がはづんだものだ、夜になると店の机や結界を取り片付けてドタンバタン跳ね返り、終には直輸の店(内榮町五丁目に直輸砂糖合資會社と云へるあり)へ迄も押し掛けて騒いだものだ、殊に西川さん宿直の晩には一層激しく大勢で暴れた、それには理由がある、何となれば西川さんが必ず圓札一枚を奮發せらるゝ例であつたからである、サア此御祝儀が出ると、誰やらが元町六丁目の江戸屋へ走り生菓子を買つて來る、それを待ち兼ねて御馳走になると云ふ寸法であつた、併し圓札皆を御馳走になる譯ではない、此内二十錢？で舶來煙草「ストレットカット」一個を買つて施主へ御釣を返したもんだ。

行儀のよい人